

第4回ユネスコスクール全国大会 持続発展教育(ESD)研究大会 「ESDの実践上の課題解決に向けて」

— 報 告 書 —

開催日：平成25年1月26日(土)

会 場：国立大学法人奈良教育大学

第4回ユネスコスクール全国大会 持続発展教育(ESD)研究大会

報 告 書

平成25年1月26日(土)

国立大学法人奈良教育大学

主催：文部科学省 日本ユネスコ国内委員会

共催：NPO法人日本持続発展教育推進フォーラム

国立大学法人奈良教育大学

公益財団法人ユネスコ・アジア文化センター

公益社団法人日本ユネスコ協会連盟

後援：外務省 環境省 奈良県教育委員会 奈良市教育委員会 全国連合小学校長会

全日本中学校長会 全国高等学校長協会 全国国公立幼稚園長会

日本私立大学協会 一般社団法人日本私立大学連盟

日本私立中学高等学校連合会 日本私立小学校連合会

全日本私立幼稚園連合会 社団法人日本PTA全国協議会

全国国立大学附属学校連盟 一般社団法人国立大学協会 日本教育大学協会

ユネスコスクール支援大学間ネットワーク(ASPUvivnet) 株式会社教育新聞社

目 次

◆総括	3
◆実施概要	5
◆告知	6
◆大会日程	7
◆実施内容	
開会式	8
2014年「持続発展教育（ESD）に関するユネスコ世界会議」に向けて	10
クンジャンゴン郡立第一高等学校（ミャンマー）の取り組み	11
特別授業	12
テ ー マ 語りとESD 「声に出して感じる自然のうつくしさ～やまなしを中心に～」	
特別講師 平野啓子（語り部・かたりすと／日本ユネスコ国内委員会広報大使）	
学 校 奈良教育大学附属中学校1年生	
テーマ別交流研修会	
第1分科会 地域・博物館・企業・NPO等との連携	14
第2分科会 大学との連携を通じた質の向上	14
第3分科会① 学校間交流 国内	15
第3分科会② 学校間交流 海外	15
第4分科会 ESDの校内浸透・連携と活動の継続性	16
第5分科会① 教科・学習指導要領とのリンク（幼稚園、小学校）	16
第5分科会② 教科・学習指導要領とのリンク（中学校、高等学校）	17
第6分科会 コミュニケーション能力・問題解決能力とESD	17
第7分科会 国際理解教育	18
第8分科会 環境教育・生物多様性	18
第9分科会 ESDと評価	19
シンポジウム	20
ランチョンセッション（協力企業による社会貢献活動紹介）	27
閉会式・持続発展教育（ESD）大賞表彰式	31
企業展示・団体展示、情報交換会	33
◆アンケート結果	34

総 括

文科省、日本ユネスコ国内委員会主催の第4回ユネスコスクール全国大会—持続発展教育（ESD）研究大会（共催・NPO法人日本持続発展教育推進フォーラムほか、後援・教育新聞社ほか）が平成25年1月26日、奈良市の奈良教育大学で開催され、全国から約600人の現場教師、研究者、企業関係者などが参加した。

今回は、「ESDの実践上の課題解決に向けて」が主題。広がりを見せるESDがかかえる課題、成果などにつき協議することがねらいである。

午前中は開会式と特別授業。開会式では下村博文文部科学大臣のあいさつを加藤重治国際統括官が代読、



「02年の第57回国連総会でわが国の提唱により、05年から14年までが『国連ESDの10年』（DESD）と決議された。最終年には、ESDに関するユネスコ世界会議が岡山市で開催される。ユネスコスクールやESDへの日本の取り組みと貢献は、これまで以上に注目を集めている」「ESDは将来にわたって持続可能な社会を構築するために問題意識を持ち、人と意見を交わし、共にあるべき方向に向かって行動する人材を育てる教育。今回は、ESDが学習指導要領の示す『生きる力』の育成に、具体的にどう貢献するかを考える場としたい」などと強調した。

このほか、日本ユネスコ国内委員会・金澤一郎副会長、奈良教育大学・長友恒人学長があいさつした。

次いで、14年の国連ESDの10年最終年に開かれる世界会議に向け、日本ユネスコ国内委員会からユネスコスクールガイドラインの説明がなされるとともに、第1回SEAMEO-Japan ESD Awardを受賞したミャンマーのクンジャンゴン郡立第一高等学校の実践発表があった。

特別授業では、語り部・かたりすとの平野啓子日本ユネスコ国内委員会広報大使が特別講師を務め、「語りとESD—声に出して感じる自然のうつくしさ」をテーマに授業を行った。生徒は奈良教育大学附属中学校の1年生と大学生。清少納言の「枕草子」、宮沢賢治の「雨ニモマケズ」「やまなし」を教材に、語りや朗読に関する指導を行い、声を出して体全体で表現すること、声に感情を込めて語ることなどの素晴らしさを大観させた。



昼休みには、CSRとして学校のESDを支援する活動を展開している企業・団体がその活動の趣旨、成果などを報告するランチョンセッションも行われた。

午後は、まず9テーマ11分科会に分かれてのテーマ別交流研修会を開催。「ESDの校内浸透・連携と活動の継続性」「教科・学習指導要領とのリンク」「コミュニケーション能力・問題解決能力とESD」などのテーマに沿い、ESD実践上およびユネスコスクールとしての課題を出し合い、その解決に向けて話し合った。全国のユネスコスクールが一堂に会し、課題について検討する唯一の機会であるだけに、非常に熱心で充実した協議が行われた。

シンポジウムは、「グローバル社会に通用する人材をESDでどのように育てるか」がテーマ。大学を軸

としたプロジェクト型、地教委の主導型、高校の独自の実践型の3つの事例報告がなされ、ESDによるグローバル人材育成の方途を探った。

国連ESDの10年の最終年が迫ってきたこともあり、例年以上に熱心な検討が行われ、最終年に向けてさらなる飛躍が期待できる大会となった。



実 施 概 要

■日 時 2013年1月26日(土) 受付 9:30 ～ 開会 10:00 / 閉会 17:00

■会 場 国立大学法人奈良教育大学 (奈良市高畑町)

■対 象 ユネスコスクール関係者(教職員)、一般幼小中高校教員、教育行政関係者、
教育研究等関係者(大学・研究所等)、保護者、ユネスコ関係者、ユネスコ協会関係者、
企業関係者、学生、その他持続発展教育(ESD)に関心のある方

■参加者 総計 約600名
(ユネスコスクール登録校(申請中を含む)、それ以外の学校、自治体、文部科学省関連、企業など)

■主 催 文部科学省 日本ユネスコ国内委員会

■共 催 特定非営利活動法人日本持続発展教育推進フォーラム
国立大学法人奈良教育大学
公益財団法人ユネスコ・アジア文化センター
公益社団法人日本ユネスコ協会連盟

■後 援 外務省、環境省、奈良県教育委員会、奈良市教育委員会、全国連合小学校長会、
全日本中学校長会、全国高等学校長協会、全国国公立幼稚園長会、日本私立大学協会、
一般社団法人日本私立大学連盟、日本私立中学高等学校連合会、日本私立小学校連合会、
全日本私立幼稚園連合会、社団法人日本PTA全国協議会、全国国立大学附属学校連盟、
一般社団法人国立大学協会、日本教育大学協会、
ユネスコスクール支援大学間ネットワーク(ASPUnivnet)、株式会社教育新聞社

■協 力 MSD株式会社、OMソーラー株式会社、カシオ計算機株式会社
サントリーホールディングス株式会社、全国農業協同組合連合会
P&Gジャパン株式会社、株式会社ユニクロ、LIXILリフォームネット

大会日程

時間	プログラム	会場
09:30～10:00	受付	講堂
10:00～10:20	開会式	講堂
10:20～10:50	2014年持続発展教育（ESD）に関するユネスコ世界会議に向けて ユネスコスクールガイドラインについて SEAMEO-Japan ESD Award 受賞校による発表（ミャンマー）	講堂
10:50～11:40	特別授業 「語りとESD「声に出して感じる自然のうつくしさ」 特別講師：平野啓子（語り部・かたりすと／ 初代日本ユネスコ国内委員会広報大使） 学校：奈良教育大学附属中学校1年生	講堂
11:40～13:00	ランチョンセッション（協力企業による社会貢献活動の紹介） 同時開催：ESD関連団体による展示	講義棟 101、 102、308、 大講義堂
13:00～14:40	テーマ別交流研修会 ①地域・博物館・企業・NPO等との連携 ②大学との連携を通じた質の向上 ③－1 学校間交流 国内 ③－2 学校間交流 海外 ④ESDの校内浸透・連携と活動の継続性 ⑤－1 教科・学習指導要領とのリンク（幼小） ⑤－2 教科・学習指導要領とのリンク（中高） ⑥コミュニケーション能力・問題解決能力とESD ⑦国際理解教育 ⑧環境教育・生物多様性 ⑨ESDと評価	講義棟 104、 105、201、 213、204、 205、206、 208、209、 303、306
14:50～15:20	交流研修会 全体報告会	講堂
15:20～16:40	シンポジウム 「グローバル社会に通用する人材をESDでどのように育てるか」 プロジェクト型（RICEプロジェクト）、自治体主導型（教育委員会）、ユネスコスクールの実践、の3事例報告と協議	講堂
16:40～17:00	持続発展教育（ESD）大賞表彰式・閉会式	講堂

開 会 式



浅井孝司氏（文部科学省大臣官房国際課 国際協力政策室長）の司会進行により、開会式が進められた。開会にあたり4名の方から挨拶があった。以下に概略を報告する。



1) 下村 博文（文部科学大臣）

〈代読：加藤 重治（文部科学省 国際統括官）〉

第4回全国大会開催にあたり、主催者として関係者に感謝の言葉が述べられた。

2014年DESD最終年合が名古屋市・岡山市において開催されることとなり、日本の取組・貢献がこれまで以上に注目されている。ESD活動拠点「ユネスコスクール」が昨年12月現在で550校に至り、活動の質を確保するためガイドラインを策定した。さらなる活動の充実が期待される。今大会では学

校現場におけるESDの実践上の課題解決に向け、先進的事例を取り上げながら解決策を議論するが、「生きる力」の育成にどう貢献できるのか共に考えていきたい。また東南アジア教育大臣機構加盟国内の取組を表彰するため「SEAMEO-Japan ESD Award」を創設し、本大会にはミャンマーより第1位受賞校クンジャンゴン郡立第一高等学校が参加している。盛会を祈念し挨拶に代えたい。



2) 金澤 一郎（日本ユネスコ国内委員会 副会長）

「国連持続可能な開発のための教育の10年（DESD）」は、2002年の国連総会で日本が世界に提案し、ユネスコが主導機関となり世界的に推進している。

日本ユネスコ国内委員会はESDの振興等に努め、関係大臣への提言・建議を提出するなどの活動を行っている。2008年策定の教育振興基本計画ではESDが教育の重要理念の一つとして位置づけられ、ユネスコスクール加盟校も飛躍的増加を遂げる中、質の確保の重要性から、昨夏にはガイドラインを策定した。

教育現場に限らず、社会全体で持続可能な社会の担い手づくりに取り組むことが重要で、その成果を2014年の最終年合に向け集大成させ、本大会を契機に一層の学校間及び地域の関係機関の交流を深めていただきたい。関係者へ感謝するとともに、引き続きの支援をお願いしたい。



3) 長友 恒人

(国立大学法人奈良教育大学長 ASPUnivNet代表)

会場大学及びユネスコスクール支援大学間ネットワーク (ASPUnivNet) を代表して、参加者と関係者に、歓迎と感謝の気持ちが述べられた。

奈良県では幼稚園から大学まで33校がユネスコスクールに加盟し、世界遺産や地域環境をベースにESDに取り組み、奈良ASPUnivNet を結成し活動の質の向上を図っている。なかでも奈良教育大学は日本の大学として初のユ

ネスコスクールとなり、附属の小中学校・幼稚園を含め全学を挙げてESD理念に基づいた教育に取り組んでいる。

現在16大学が加盟するASPUnivNetは、大学間ネットワークにより全国のユネスコスクールを支援するという日本独自の組織である。当大学は事務局を担当しているため、要望などお受けすると共に、明日開催される「世界遺産学習全国サミット in 奈良」への参加もお願いしたい。

4) 中室 雄俊 (奈良市教育委員会 教育長)

平成10年に奈良の文化財が世界遺産に登録されたことを機会に、奈良らしい教育の中核として「世界遺産学習」を進めてきた。奈良の文化財・歴史を見つめ直し深く知ろうと呼びかけ、単に歴史ある文化財や伝統を学ぶのではなく、受け継いできた人々の営みを学ぶことに軸を置いている。

明日開催の「世界遺産学習全国サミット in 奈良」には、全国から多くの方に参加いただく。奈良と姉妹都市の韓国慶州の子どもたちによる地域の文化財・誇りについての発表も予定しており、奈良から発信し全国に広げていきたい。

奈良市のユネスコスクールは現在27校園で、幼稚園も加盟している。今後も加盟校を増やししながら、奈良らしい教育の中核に「世界遺産学習」を位置づけ推進していきたい。

2014年「持続発展教育(ESD)に関するユネスコ世界会議」に向けて

1. 2014年「持続発展教育(ESD)に関するユネスコ世界会議」について

- ・2014年11月ユネスコと日本政府の主催で、「持続発展教育(ESD)に関するユネスコ世界会議」を名古屋市で、その他ステークホルダーの会議を岡山市で開催する。
- ・本年9月にはユネスコスクールの制度ができて60周年を記念する大会が韓国で開催される。
- ・岡山市での世界会議の主



催はユネスコと文部科学省、期間は11月6日～8日の3日間。中心となるのはユネスコスクールの世界大会で、以下のように3部門に分かれて実施する予定。

①Student（高校生）フォーラム（11月6～7日）

テーマはESD。高校生たちが、持続発展可能な社会をつくるにあたりどのような社会をつくりたいか、知恵を出し合う会議。ディベート大会ではなく、高校生が運営する会議を開き、世界会議に提言を出す。1チーム5名編成で海外から33チーム、日本から9チーム、合計42チームが参加する。まだ準備段階にあるが、6月には募集を開始したい。（英仏日の同時通訳で実施）

②教員フォーラム（11月7日）

教員の視点から高校生の運営する会議をサポートしてもらい、提案も組み込んでもらう。

③ユネスコスクール全国大会（11月8日）

2014年全国大会の開催。海外からも教員や高校生が参加する。

2. ユネスコスクールガイドラインについて

昨秋、都道府県の教育委員会を通じ、日本ユネスコ国内委員会の「ユネスコスクールガイドライン」を配布した。ユネスコスクールのガイドラインを確認することが目的。ユネスコスクールとESDを進めるにあたり、どの学校もこのガイドラインに沿った活動をしてもらいたい。義務ではないが、ユネスコスクールの基本事項として、加盟を検討している学校もどのような活動をすればいいのか理解してもらいたい思いで作成した。

クンジャンゴン郡立第一高等学校(ミャンマー)の取り組み

～第1回SEAMEO-Japan ESD Award受賞校～

1. SEAMEO-Japan ESD Awardの紹介

この賞は、文部科学省が2011年度に拠出し、SEAMEO(注)加盟国内におけるESDの促進を目的として、ESDの推進にあたって顕著な取組を行っている東南アジアの小・中・高等学校を表彰するために設立した。第1位受賞校には、日本のユネスコスクールとの交流を深めるため日本訪問の機会を提供する。第1回目となる2012年のテーマは「防災」で、防災教育に取り組むミャンマーのクンジャンゴン郡立第一高等学校が第1位を獲得し、本大会にてその取組を簡単に紹介した。



(注) SEAMEO(東南アジア教育大臣機構):教育、科学技術、文化を通じ、ASEAN諸国間の協力を促進することを目的に1965年に発足。加盟国はASEAN諸国及び東ティモールの11か国。域内に、教育研究分野、医学教育分野、農学教育分野等のセンターがあり、主に教員研修や教材開発を実施。加盟各国からの拠出金により運営。

2. クンジャンゴン郡立第一高等学校 事業計画・活動について

■概要

当校は2008年のサイクロンにより被害を受け生徒2名が死亡したことから、防災活動を開始した。2012年度は、区役所・町役場・学校評議員会、PTA、生徒会、保護者、警備担当者、地域住民などの参加を得て「学校防災計画(SDMP)」を策定し、関係者と共有した。防災教育活動は学校行事カレンダーに盛り込み、定期的モニタリングを実施している。



■発表(Ms. Than Than Aye 教員)

SDMPを実行・推進するために分科委員会、サブ委員会などの組織をつくり、3つのテーマ(計画及び役割の分担、災害リスク評価、資源活用)に沿って計画的な活動を展開している。具体的には、英語のBefore/During/Afterの3段階にわけ、災害前の防災活動、災害発生時の対応、災害後の対応として実施する。また、災害発生時には「緊急チーム」や「早期警告チーム」など5つのチームに分かれて行動する。

実際の活動として、災害時に不可欠な学校周辺地図を描く活動、市長等による防災教育実施場面、先生とPTAが協力している様子、生徒が災害時に避難所となる施設を見学している様子、緊急チームが実際に役割を演じている様子等の写真が紹介され、地域と連携した活動であることも示された。

この取組を持続させるために、毎週練習を行い、年1回活動の分析などを行っている。この取組の最も良い点は、学生たちが自信を持って活動していることで、それを学校としても誇りに思っている。

特 別 授 業

語りとESD「声に出して感じる自然のうつくしさ～やまなしを中心に～」

「文字化されるよりも、まず声があったはずだ。声を大切にしよう。声には感情も込めることができる。声は体全体で表現し、体全体で感じるものだ。ESDの学びは体全体。ESDの学びは参加だ」

特別講師：平野啓子（語り部・かたりすと／初代日本ユネスコ国内委員会広報大使）

対象生徒：奈良教育大学附属中学校1年生、奈良教育大学ユネスコクラブ

1. 授業開始に向けての言葉（平野先生から）

今朝ホテルの朝食に出された奈良漬は、地元のを大切にしておもてなしとして感じられ、おいしかっただけでなく、心が見えるようで嬉しかった。人がおいしいと感じるのは普遍の心だが、地元のどこかに素晴らしいものが眠っている。食べ物に限らず美術、風景等すべてのつながりを考え、考えながら発見していく。これがまさにESDで学ぶということ。今日は奈良教育大学ユネスコクラブの大学生のサポートを得ながら、奈良教育大学附属中学校の皆さんに日本の誇る名作・名文を声で表現してもらい、日本の誇る日々の美しさを感じていただきたいと思う。

2. 生徒による実践

日本を代表する3つの名作・名文について、先生の指導のもと、生徒が様々な方法で声を出して表現した。

1) 清少納言「枕草子」

まず、有名な「春はあけぼの～」の語りを生徒が行った。「枕草子」は、清少納言が日本の四季の中でよいと思ったものを記した作品である。もともとは京都の風景を描いたものだが、そうした風景はどこでも身近な場所で見つけることができる。文学を通して、からだ全体で日本の自然を感じていくよう、2つの方法で読む実践が行われた。

①全員による語り

美しい自然を思い描きながら全員で声を出してもらうが、その際、真ん中に立つ生徒がきっかけをつくり、マイクの前に出るタイミングや、声を出すタイミングの合図を出していく。他の生徒は、その生徒の首の動きを注意して見ることで合図を感じ取りながら、動きを合わせて皆で声を出して「枕草子」を読む実践が行われた。

②手話語り

人は声や言葉でコミュニケーションすることが多いが、耳の不自由な人は手話でコミュニケーションをとる。手話で名作を伝えるとき、美しい手の動きで表現することで芸術のように美しくなることがある。初めての人でも、手話語りをを行うとすぐに暗記することができる。春の部分から、「枕草子」の言葉ひとつずつについての手の動きを先生から学び、手話をつけながら、生徒全員で声を出して読む実践が行われた。

実践後、耳の不自由な方とのコミュニケーションをとる場合の手話と、芸術としての手話語りは異なることを理解しておくよう注意がつけ加えられた。

2) 宮沢賢治「やまなし」

全国に通じる宮沢賢治の描く世界を、先生の指導のもと様々な方法で読み、理解していく。全員で読むところ、数人ずつに分かれて読む「群読」、交代で読む「分ち読み」、一人一役のドラマ形式で読むところを分けて実践してみる。

リハーサルで決めたそれぞれの役のセリフを、風景・比喻表現・動き・場面等を考えながら、内容がよく伝わるように表現読みする練習や、二人一組になりセリフの理解を進めるために手の動きをつけながら読んでみる練習等を行った。賢治の文章は、擬音・擬態語が多く、はっきり読むことで文章の良さが引き立つという指導もあった。最後には大学生をお父さん役にして担当に分かれ、全員で読む実践が行われた。

また、この場面に合う風景の映像として、地元の景色から何枚も写真を撮ってもらい、最も場面に合っている佐保川の写真を選び、映像による視覚化が図られた。そして地元にも賢治の世界があること、賢治の普遍的な世界観は、実は身近な地域にもあることを、視覚を通して体感してもらった。

3) 宮沢賢治「雨ニモマケズ」

声を発すると元気になる。子どもたちが持っている芯がしっかりする。こうした思いから、大学生も参加し、全員で宮沢賢治「雨ニモマケズ」を読む実践が行われた。厳しい農家や農業の実状を知り近代農業を推進した賢治は、実体験を踏まえて凶作時の深刻な様子などを表現している。そうした賢治の思いやそれぞれの家や近所のことを思い浮かべながら、気持ちを込めて読んでみるのが大切である。また、貧しい生活の中で、どれほど食べ物が大切にされたかを記した民話などもある。共通語で書かれたものもあるので、合わせて読んでみるのもよいとの紹介もあった。会場の参加者も一緒に読む実践が行われ、特別授業は終了した。



テーマ別交流研修会

第1分科会 地域・博物館・企業・NPO等との連携

発表 奈良県奈良市立月ヶ瀬中学校 教頭 井本 章子
司会 奈良県奈良市立鼓阪北小学校 教頭 門城 宏隆

最初に月ヶ瀬中学校から、地域ぐるみで取り組んだESD活動の実践報告があった。アルミ缶回収から得た収益で車椅子を寄贈する活動は、17年目にして遂に100台を突破した。これは、教育の柱を「ふるさと学習」と位置づけ、活性化に取り組む地域の思いを受けながら、地域と一体となって取り組んだ賜物である。長年にわたり活動を持続させるためにはモチベーションの維持が大切であり、車椅子の寄贈による生徒の達成感と自信に加え、ユネスコスクールへの加盟による視野の広がりも大きな要因となった。



次に、テーマである「地域・博物館・企業・NPO等との連携」における具体例や課題について全体討議が行われた。いずれの取組においても、単発的ではなく継続することが大切であり、そのためには双方にとってメリットのある連携とすることがポイントとなる。また、持続発展社会をつくるための企業の社会的貢献の重要性や、学校が連携を組織的に進めるためのリーダーの必要性等について討議された。

第2分科会 大学との連携を通じた質の向上

発表 宮城県黒川郡大和町立鶴巣小学校 教諭 池山 潤子
司会 奈良教育大学 北村 恭康

当分科会では、宮城県黒川郡大和町立鶴巣小学校から宮城教育大学との連携のもと5年生の「Riceプロジェクト」4年生の「川の活動」の実践報告があった。報告内容についての質疑では、キャパシティの問題として、大学と連携校との距離、時間、児童数、大学生の人数などがあがっていた。また、「川の活動」からは、子どもの気づき・発言から、絶滅危惧種の魚が「なぜ生息し続けているのだろうか」を大学との連携の中で考えていく中から、より思考力の高まる環境教育ができるのではないかという示唆があった。



「連携での課題」のテーマの中で、小・中学校からは教員として教材開発、授業方法の改善などに支援していただき、子どもに対しては、興味を持たせる授業から新しい知識の広がりが見られた、などの発言があった。また、大学からは、①学校からの要望に応じるように支援し学びが向上しているのではないだろうか。②NPOを通じて学校とつながっているのでUnivNetを広げていくのが課題であるという意見も出された。さらに、個々の研究ではESDにつながるはずであるが、「つながっている」という認識不足も見られるという発言もあった。最後に、学校の取り組んでいる個々の事柄の「つながり」の「みえる化」を図り、全体像の共有化をすることが大切であり、大学としても支援・連携する体制があればよいのではないか、という意見が出された。

第3分科会① 学校間交流 国内

発表 岡山県岡山市立第三藤田小学校 教諭 藤澤 正宏
司会 奈良県奈良市立富雄第三小学校 教諭 河野 晋也

岡山市立第三藤田小学校から、藤田中学校区内の中学校一校、小学校三校での連携について実践報告があった。持続発展可能な社会の担い手を育てるためには小・中・高…と学びを継続していくことが重要である。発表校では小・中学校の教員がE S Dにおいて「身に付けさせた力」を話し合い、学年ごとに小学校三校共通の目標・テーマを定めて、カリキュラムを作成している。そうすることで同じ学びを積み重ねた生徒を中学校へ送り出し、9年間の系統的な学習を可能にしようとしている。

この報告を受けて分科会での意見交流では、どのように連携していくかという課題について話し合われた。外部・専門機関やコーディネーターのような地域人材を活用する方法も有効である。特に小・中学校間の差は大きく、連携をとる難しさを感じられたが、教職員が必要なカリキュラムについて話し合い、小中学生にとって互いにメリットのある学びの機会を生み出すことでこの問題に取り組んでいくことが大切である。



第3分科会② 学校間交流 海外

発表 東京都立杉並総合高等学校 校長 三橋 信也
司会 奈良県奈良市立済美南小学校 教諭 竹本貴美子

杉並総合高等学校からは、留学生の受け入れや、オーストラリアの学校へのホームステイなど、国際交流の機会を年間通して多数設け、生徒にとって海外が身近に感じられる教育活動の実践報告があった。

本分科会では、海外留学を経験した生徒は成長する一方で、全員が海外留学を経験できる訳でなく、経験する機会に個人差が出てしまうことが課題となった。参加者の校種が幼稚園から大学まであり、幼稚園や小学校の子どもには海外留学が無理であることも考慮する必要があった。

そこで、日本にいながらでもできる国際交流の方法について、参加者から多数のアイデアや実践例が出された。オールイングリッシュのキャンプ、海外の日本人学校との交流、ウェブを利用したメッセージ交換、海外の学校との共同制作をするアートマイル、海外の日本語学校との交流などが挙げられた。また、ユネスコを通じての交流も可能で、相談できることも確認できた。



第4分科会 ESD の校内浸透・連携と活動の継続性

発表 宮城県気仙沼市立面瀬小学校 教諭 岩槻 仁
司会 奈良県奈良市立飛鳥小学校 教諭 松浦 慎

面瀬小学校では、ESDが校内に浸透するために生活科・総合的な学習の時間をESDの核に置き、研究主題として足並みをそろえている。また毎年プログラムを見直して変更しており、地域人材の連携においても、毎年同じ人をお願いするとは限らず、新しい人を発掘している。「継続させるために、あえて継続させない（継続のための非継続）」という視点を得ることができた。この報告をもとに小グループをつくって協議を行った。全体協議の中で、教職員全体でESDについて共通理解を図るための研修の必要性が共有された。また、今後ESDが浸透し継続していくためには、ESDが学力向上につながることを明らかにし、教職員はもとより、保護者や地域住民の理解を得ていくことが必要であるという意見が出された。



第5分科会① 教科・学習指導要領とのリンク（幼小）

発表 新潟大学教育学部附属幼稚園 教諭 松井 陽一
新潟大学教育学部附属中学校 教諭 神子 尚彦
新潟大学教育学部附属長岡小学校 教諭 丸山 悦子
司会 奈良県奈良市立飛鳥小学校 教諭 三木 恵介

新潟大学附属長岡校園からは、学校独自の新設教科である「社会創造科」の取り組みについての報告があった。「社会創造科」では“地域の人と共に問題を解決”していくことを目標に、幼小中の12年間の長いカリキュラムの中で学びを進めている。そこでは子どもと子ども、子どもと地域・企業が交流し深め合っていくことで互いに互惠関係（win-win）を気付いていくことが重要であるとのことであった。

報告の後、カリキュラム・具体的な実践内容・評価・企業との関わり方など多岐にわたる内容について活発な質疑応答がなされた。



持続可能な社会の担い手を育成するにあたっては、①地域とのつながりをどのように築いていくか②子ども同士の交流（異学年）をいかに設けるか③教員間の連携、が重要なポイントになってくるようである。連携・調整の上で苦労することも多いようだが、「社会創造科」の取り組みによって子どもたちの自己肯定感が高まっていると実感できることが大きな成果と言えるようである。

第5分科会② 教科・学習指導要領とのリンク（中高）

発表 石川県金沢市立泉中学校 教諭 浜中 真希
司会 奈良県奈良市立月ヶ瀬中学校 教諭 大坪 大紀

はじめに、金沢市立泉中学校の浜中真希先生からの報告をいただいた。発表の内容は、自分たちの住む地域から世界へと同心円状に学びを広げていく学習を、三年間一貫して行っていく取り組みであった。身近なテーマにもとづいて調査、レポート作成、発表を繰り返し行う問題解決学習をベースとし、各教科の担当がそのテーマに見合った単元をピックアップして学習を発展させていく形で、教科とリンクをしたESD活動を実践している、という内容であった。



その発表を受けて、分科会ではグループ討議を行った。「どのように教科ごとにESDに取り組めばいいか」「ESDを職場で広めることの難しさ」「ESDの評価の方法」などの議論があった。その結果「学校組織の中でESDを軸として、教科とリンクしながら一貫した活動を行っていくためには何が必要か」、ということが争点となった。最後に、今後、教師一人一人がESDのメリットや必要性を理解し、学校全体で意識を高めていくための環境づくりや取り組みが大切であることが今後の課題であると共通認識された。

第6分科会 コミュニケーション能力・問題解決能力と ESD

発表 香川県三豊市立下高瀬小学校 教諭 萬亀 弘吉
司会 奈良県奈良市立都跡小学校 教諭 池見 繁

三豊市立下高瀬小学校から「省エネ」を核とした、エネルギー環境教育において、身近な省エネの発見・実践・発信を通して、コミュニケーション能力、問題解決能力を培う実践が報告され、それをもとに研修会が行われた。

「コミュニケーション能力の育成」には、児童の主体的な活動が重要となる。児童が主体的に活動するには、その問題が身近であり、切実な問題でなくてはならない。それにより児童は学習を深めていくにつれ、「伝えたい。聞きたい。」と思うようになるのである。

また「問題解決能力の育成」に関しては、自分で問題を発見、検証し、伝えることでその力が育成される。つまり「問題発見解決発信学習」であることが重要である。ここでもまた、上述した観点から児童の主体性、問題の切実性が重要となる。

すなわちESDを通したコミュニケーション能力・問題解決能力の育成には、児童の主体性と、それを保証するための問題の切実性が重要である、ということができる。



第7分科会 国際理解教育

発表 愛知県立豊田東高等学校 教諭 奥田 紀子
司会 奈良県奈良市立都南中学校 教諭 松本 彩恵

最初に愛知県立豊田東高等学校の奥田紀子先生から実践報告があった。「異文化理解」という授業の中で、世界遺産の学習から自分たちのまちへ目を向け、自分たちのまちを世界へ発信していく、というように学習を広げておられた。また、豊田東高等学校で行われているESDの総括ともいえる「総合発表会」について質疑応答があった。

次に各校での国際理解教育の実践や、実践における課題、また実践に向けての課題の共有を目的にグループ討議が行われた。そこでは、帰国生徒や様々なルーツを持つ生徒をいかにまきこみ、子どもの思いに寄り添いながら実践していくかということ、「国際理解教育といえば英語科」と捉えられてしまうことについて、教科横断的発想や学校全体のものとする必要性、評価の難しさにおいてはESDの視点をはっきりとさせ、その視点から子どもの変容=気づきを評価することができる、といった議論が行われた。



第8分科会 環境教育・生物多様性

発表 東京都大田区立大森第六中学校 教諭 柴崎 裕子
司会 奈良県奈良市立三笠中学校 教諭 河内 淑恵

最初に大田区立大森第六中学校から、防災拠点整備事業モデル校としての取り組み、エコキャップ運動、ミミズコンポスト運動、ホテル復活プロジェクト等についての実践発表が行われた。取り組みの成果として、学校が落ち着く、学力向上、自己肯定感向上が挙げられた。次に質疑応答の時間を持った。参加者の所属組織でも発表校と似た取り組みを行っている場合が多く、そこでうまくいっていない問題を発表校はどのように解決したのかという質問がされた。児童・生徒への動機付け、消極的な児童・生徒をどのように参加させるか、活動に関する技術の確認、地域とのかかわり方、地域愛の育て方、予算、時間の確保など、内容は多岐にわたった。

その中でも多く出されたのは、発表校も課題として提示していた「地域とのかかわり」に関する質問だった。発表校からは、職場体験を通してできた繋がりを大切に、その後もかかわりを持っていることや、他機関と協力して駅前に花を植えるといった活動が紹介された。

発表者と参加者がともに課題としている内容を深め、相互に学び合える時間を持つことができた。



第9分科会 ESD と評価

発表 宮城県気仙沼市立階上中学校 教諭 戸羽 康幸
司会 奈良県奈良市立済美小学校 教諭 大西 浩明

まず、気仙沼市立階上中学校の実践報告があった。防災に視点を置いたESDに取り組んできたが、東日本大震災を経て、新たに実行性を伴った学習活動を展開し、昨年12月の大きな地震のときには大人がオロオロする中、生徒が訓練通りに動くなどの成果が見えたという内容であった。その後、質疑応答の中で、評価に関わって議論が展開された。ESDの評価については、国立教育政策研究所などから観点は示されてはいるものの、具体的・実際的なものになっていないのが実状である。能力面の評価はある程度できて、価値観や態度面の評価はどうするのかという問題がある。ESDでは、自分の考えの変容を自覚し、自分自身の生き方をどう変えていくかが重要である。しかし、今すぐにそれを評価できるものではないところが大変難しい。ESDを広く一般化させていくためにも、今後さまざまな実践の中で、評価方法も含めて「ESDの評価はこうすればできる」「ESDの評価はこれを大切にする」というものが明示できるような研究・議論が重要である。



シンポジウム

「グローバル社会に通用する人材をESDでどのように育てるか」

(コーディネーター：中澤静男 奈良教育大学 持続発展・文化遺産教育研究センター専任講師)

はじめにコーディネーターから、本日、事例を報告いただく3名の講演者の紹介と進め方について説明され、シンポジウムがスタートした。下記に概要を報告する。

◆進め方：

1. シンポジウム・テーマの説明
2. 事例報告
 - 1) プロジェクト型：宮城教育大学（ASPUivNet「Riceプロジェクト」事務局担当校）
准教授 川崎 惣一
 - 2) 自治体主導型：奈良市教育委員会 学校教育課 主幹 石原 伸浩
 - 3) ユネスコスクールの実践：広島県立広島井口高等学校 教諭 永尾 和子
3. 各事例のコマーシャルポイント・問題点・解決策
4. 客席への投げかけと質疑応答
5. 今後の展望
6. まとめ

1. シンポジウム・テーマの説明

私たちは現在、環境問題、生物多様性、気候変動、エネルギー枯渇、平和、人権など、一国では対処できない地球的諸課題に囲まれている。持続発展社会を作るためには、こうした諸課題を解決できる人材を育成する必要がある。本シンポジウムのテーマ「グローバル社会に通用する人材をESDでどのように育てるか」は、このような認識のもとで設定されたものである。

2. 事例報告

1) 「ASPUivNet「Rice（おこめ）プロジェクト」について」

(平成24年度 日本／ユネスコパートナーシップ事業)

宮城教育大学（ASPUivNet「Riceプロジェクト」事務局担当校） 准教授 川崎 惣一

最近の若者は内向きと言われるが、大人が内向きであれば、子どもも内向きになる。こうした傾向の中で、学校教育のグローバル化を進める必要性と、その使命の大きさを感じている。

ユネスコスクールの活動目的は、ネットワークを活用し世界中の学校との交流を通じ、情報や体験を分かち合うこと、地球規模の諸問題に若者が対処できるような新しい教育内容や手法の開発・発展を目指すことにある。そしてASPUivNet（ユネスコスクール支援大学間ネットワーク）は2008年、ユネスコスクール加盟学校を支援することを目指し、全国8大学により設立された。2009年度以降、日本／ユネスコパートナーシップ事業を受託し、全国各地におけるESDの推進とユネスコスクール支援事業を展開している。2012年11月現在での加盟は16大学に及ぶ。このASPUivNet

では、これまでのユネスコスクール活動支援に加えて、ユネスコスクールとしての国境を越えた学校間交流を促進するために、「Rice（おこめ）プロジェクト」を展開している。このプロジェクトでは、国内外にネットワークをつくり活動している。ネットワークを介して相互間で学びあうこと



の重要性は高く、ユネスコスクール加盟の最大メリットも、ネットワーク構築により教育の質を向上できるという点にある。当プロジェクトに参加義務はないが、1つの提案として参考にしていただきたい。

ユネスコで認めているネットワークの世界的プロジェクトには「世界遺産プロジェクト」など様々あるが、当プロジェクトは、アジアの国際間プロジェクトがない点に着目し構想された。アジアの主食である米をシンボルに、アジア中心にネットワークを構築することが大きな目的となっている。また、ユネスコスクール活動目的に基づき、「Rice（おこめ、イネ）」をテーマに、国内の学校間及び国際的な交流プロジェクトの推進を目指している。具体的には、加盟大学が各担当地域のユネスコスクールにプロジェクトへの参加を募り、参加学校を支援する。これまで全国20数校から参加希望があり、宮城教育大学と大阪地域の2グループに分かれ活動している。現在、海外からは、韓国とタイのユネスコスクールが参加している。

「Rice（おこめ、イネ）」は、アジアの暮らしや文化と密接に結びついた農作物であり、環境教育や食育、水、エネルギー、伝統芸能、地域遺産といった様々な分野を網羅した優れた学習テーマで、教育のための教材としても素晴らしい。日本では、小・中学校などですでに米を中心とした学習が行われているため、スムーズに入っていけるという利点もある。国内及び国際的な交流を通して、文化の多様性にふれるとともに、米や稲がこれまで自国の文化や歴史、環境の中で果たしてきた役割を学ぶことで、未来の持続可能な社会に向けて国境を越えた学びあいを促進することができる。また、外国の方と交流するためには、自分たちの地域や活動を見直し、学内や地域向けの学習成果発表会の内容を、外国の生徒がわかるように情報を整理するなど作り直したり、英語で発表したりすることが求められ、そうした活動も素晴らしい学習機会となる。

当プロジェクトは始まったばかりで、進め方などの検討が必要な段階にある。活動への興味や応用可能な事例やアイデアなどがあればお知らせいただきたい。活動を始める上で、交流の相手先を見つけ、計画を立て、シナリオを作るなどのセッティングは難しいが、そうした点はASPUivNetがサポートしていくので、参加いただきたい。

“Learn Rice, Learn Life”（東北大学 浅沼宏准教授考案）。人間は食べないと生きていけない。Riceを学ぶことで、生活・生きることを学ぶことになる。学習教材としても活用できると考え、昨年の活動をまとめた冊子を用意しているので、参考にご覧いただきたい。

2)「地域のたからものから学ぶ世界遺産学習 ～奈良発！ESDの提案～」

奈良市教育委員会 学校教育課 主幹 石原 伸浩

自治体主導型の事例との紹介があったが、奈良市は学校現場で様々な取組を行っているので、本日はそれらの取組に対する教育委員会としての思いと、学校支援の内容について紹介したい。

初めに、グローバル社会に通用する人材について、奈良市出身の左野勝司氏の講演を参考に話をしたい。左野氏は、高松塚古墳やイースター島の修復や保全に関わった方で、先月母校の中学校で興味深い講演をされた。その要旨は、19歳で海外にわたり各地の修復現場で働き始め、現地の言葉が話せなかったため大変苦労したが「負けないぞ」という気持ちが強く乗り越えることができた。また大切なものを守りたいという思いは世界共通であることを知り、現地の方々に修復技術を教えるなど各種支援を行った、というものである。この話の中に、グローバル社会に通用する人材のヒントが3つある。①「自分が本当にしたいことは何か」というアイデンティティをもつ。それが「負けないぞ」という気持ちを支える土台になる。②相手を認め尊敬する。それがなければ共に生きていくスタートラインに立つことはできない。③主体性や行動力といった自ら進んで行動する力、思考力や判断力（考える力）、協調性などのチームワーク力などを鍛え、どこでもたくましく生きる力を身に付ける。

奈良市の「世界遺産学習」はこの3要素を兼ね備えた学習となっている。世界遺産に限らず、生まれ育った地域の文化財や伝統、自然を大切なものと考え、後世に伝えてきた先人の思いや営みを称え学ぶ学習である。地域を見つめることで、地域に誇りをもちアイデンティティが確立される。また自分の生まれ育った地域を愛し誇りに思うことで、相手も同様であることを認め、相手を尊重する気持ちも育つ。アイデンティティを確立し、相手を尊重する態度は、自他共に栄える持続可能社会の原動力と言える。同時に課題を見出し、解決するために学習計画を立て、グループで調査などを進める問題解決型の学習であり、社会を切り拓き、たくましく生きていくための力を育む。ESDとは、私たちの子孫が地域で生きていくことを困難にする問題について考え、解決するための学びだが、「世界遺産学習」はそうした人材を担っていくための大切な土壌を耕し、力をつけていくための学習である。

奈良教育委員会の取組としては2つ挙げられる。1つ目は「世界遺産学習」の推進。この学習そのものが持続可能社会を発展させることであるから、大学や奈良国立博物館、奈良学校ボランティアガイドの方々と連携し、世界遺産学習推進委員会を設置し取り組んできた。平成21年にはユネスコが提唱するESDの推進を図ることを目的に世界遺産学習連絡協議会を立ち上げ、現在22の教育委員会が正会員となり情報支援などを行い大きな推進力となっている。2つ目は支援体制の充実。副読本を作成



し小学5年生に配布している。また教員研修を実施し、先生方の授業力向上を図っている。実施事例集としてティーチャーズガイドも作成している。

「第3回世界遺産学習全国サミット（2013年1月27日開催）」では、全国から先進的なESDの取組が報告される。ユネスコスクールは学校間ネットワークであり、国内外の学校間交流を盛んにしていく必要があるが、今回は韓国慶州と国内からそれぞれ3校の子どもたちが参加し交流発表会を行う。この全国サミットを実践事例の発表の場として位置付け、教育委員会ではビジョンを示し、具体的支援を行うことで当学習の充実を図り、グローバル社会に通用する人材の育成に取り組んでいきたいと考えている。資料には、昨年の全国サミット「子ども会議」で子どもたちがつくった「子ども宣言」を入れているが、このような思いをもった子どもが、「世界遺産学習」の目的であり、グローバル社会に通用する持続可能社会の担い手になると信じている。

3) 「対話によって育まれる国際理解 ～姉妹校とのペンパルアクティビティを通して～」

広島県立広島井口高等学校 教諭 永尾 和子

本校では6名でプロジェクトチームをつくり、総合的な学習の時間に「ACTI（アクティア）プラン」というプロジェクトを推進している。本日はプロジェクトリーダーを担当する立場から、学校内の取組の参考事例として、ハワイの姉妹校との関わりを中心に「ACTI」について紹介したい。



当プロジェクト発足のきっかけは、平成12年にハワイ州アイエア高校と姉妹校になったことから始まる。平成14年から総合的な学習の時間に「ハワイ学習」がスタートしたが、これはハワイに関する厚い書物を英語で読むというもので、即効性などに難点があったためすぐに中止した。その後、姉妹校との関係を生かした個人的で近い関係を作る学習にしたいと考え、ハワイへの修学旅行前に文通によりペンフレンドになるという計画を立てたが、インフルエンザで修学旅行が中止になりこの企画も頓挫した。しかし、あきらめずに逆にチャンスと考え推進したことで文通を始めることができた。

文通活動がきっかけとなり、様々なプログラムが広がった。最初は思いつきから発したが、従来の学習と体系化させることを考え、対象者別に2種のプランを用意した。ACTI(1)は高校1年生を対象に日本語でしっかり自分と社会を見つめ、英語の前に日本語で考える段階としている。ACTI(2)は高校2年生の文系・理系別に分かれ、言語にかかわらずコミュニケーション能力の育成に重点を置いている。

プラン作成に当たり、ESDの考え方を意識的に組み込んでいるが、重要なポイントとしては、①目標の明確化、②年間計画の作成、③具体的プログラムの用意（1時間毎の指導案・資料の作成）

という3点が挙げられる。プランがシステムになり、誰にでもできるようにすることがシステムをつくることである。「誰にでもできる国際交流」であることを重視しており、これが特色ともなっている。

2年生文系の年間プランには4つのプログラムがある。①日本語で様々な新聞を読み、研究テーマを探す「切り抜き新聞制作」、②ハワイ姉妹校との交流「ペンパルアクティビティ」、③前半の活動を英語で書いてまとめる「英字新聞」(中国新聞社発行、第4号刷り上がり2月末予定)、④話す形でまとめて発表する「バイリンガルプレゼンテーション」(英語5分の内容を作成・発表。文理合同発表会に向けて準備、アピール力も重視)

2年前から、ペンパルアクティビティに「クロスアート」活動を取り入れた。より深く互いの違いや共通点を考えるために、テーマを見つけて交流するものである。昨年度は「水」、今年度は「遊び」をテーマに自分たちの国の特徴を絵に描き、その絵を交換して内容を想像し、英語でまとめ、ハワイで意見交換し話し合う。こうした活動からも、各々の特徴がわかり、互いに影響しあい変化していく。日本の生徒は歴史や文化、伝統に結び付けて考えがちだが、ハワイの生徒は自分の周りの自然を描くことが多い傾向があるなど、違いと共通点を感じながら、生徒はいろいろなことを考えていく。

他にも多様に交流を進めている。日本の生徒によるマスゲームのパフォーマンスにハワイの生徒は感激してくれた。ハワイの生徒はフラダンスを教えてくれたり、ホームルームを見学させてくれたりと、当初より協力的に交流してくれている。

「96%」。この数字は、生徒が1年間の活動を通して、コミュニケーション能力の必要性がわかったと答えたパーセンテージである。実際のところ、当活動による能力の伸びは数値で測ることはできない。ただ2～3行の手紙も書けなかった子どもが、1年後には20分で画用紙1枚のカードを作れるようになる。これは英語力が向上したというより、慣れて間違いを犯すことを恐れなくなったことによる。今後もこうした活動を通して、生徒が互いの違いと共通点を理解しながら、相手の立場を考え、自ら主体的に動いていけるような活動をつくっていきたい。

3. 各事例の商業ポイント・問題点・解決策

各事例についてコーディネーターが下記3点を質問し、講演者が順に応答した。

- ①商業ポイント
- ②取組を展開する上で苦労した点、問題点
- ③問題を乗り越えるための解決策

1) 「Rice（おこめ）プロジェクト」について

- ①「Riceプロジェクト」はテーマが多岐にわたり色々な要素を含み、間口が広いという点が強みだが、これは同時に弱点にもなりうる。またアジアを中心とした国際的なプロジェクトであり、オリジナルな内容であるということ。
- ②語学の問題や担当者を見つける難しさ、教員の仕事量の増加、予算問題など、克服しなければならない課題は多い。
- ③単独でこうした問題を克服するのは容易でないが、学校間交流やネットワークづくりを上手に進めている場合は困難を何とか乗り越えている、という感想をもっている。

2) 「地域のたからものから学ぶ世界遺産学習」について

- ①奈良の特徴・強みは、豊かな古い文化財や伝統である。これを活かした取組ができることが強

みであり、地域の方々と連携して進めていけるということ。

- ②恵まれた環境を活かした取組になっているのか、常に振り返る必要がある。個々の先生方が優れた取組をしているが、それをどのように学校全体や他の学校に広げていくのか。「世



界遺産学習」についても、各取組をどうつなげ、小・中学校の連携をとっていくか。

- ③教育委員会としては、「世界遺産学習」だけに焦点を当てて考えるのではなく、教育施策総体の中で捉え考えていく必要がある。

3) 「対話によって育まれる国際理解」について

- ①姉妹校との交流。顔の見える交流を進めることができていること。プランとして体系化しながら進めていること。
- ②体系化の段階で、ゼロから様々な活動にどう結び付けるか苦労した。
- ③生徒は変化し興味関心は高まるが、考える力や英語力が実際にどの程度伸びたのか検証が必要。またグループ活動であるため、個々人の成長度も見ていく必要がある。体制については、先生方のESDに対する姿勢を高める必要がある。

4. 会場への投げかけ・質疑応答

①大阪の「Rice プロジェクト」取組内容の紹介

コーディネーターの呼びかけで、会場から「Riceプロジェクト」に参加している大阪府立北淀高校から大阪の取組状況が紹介された。大阪ユネスコスクールのネットワークを作り、希望校が参加して小中高からそれぞれ基幹校を選び、基幹校を中心に米の生産を行っている。生産と消費にテーマを絞り、各学校が独自に課題を見つけ取り組んでいることなどが紹介された。また池田市立呉服小学校からも、多文化の子どもが学ぶ母国語教室に在籍する学年で、稲を育てるなどの各種活動が行われていることが紹介された。3月には各学校で学んだことを共有し発表し合う予定。

コーディネーターから、稲作を通じ食べ物と自分の関係性を作り直す、多文化・伝統を学んでいる、ネットワークで共有し横のつながりと縦の継続性を図っている、との感想が述べられた。

②質疑応答

【質問】

3) の「バイリンガルプレゼンテーション」に関して、生徒の実践の具体的事例を紹介いただきたい、との質問が投げかけられた。

【応答】（永尾先生から）

まず「切り抜き新聞制作」の活動で、2か月程度かけて新聞を読み、年間を通じたテーマを見つけ、関心のある4分野（国際・人権・環境分野、医療・看護・福祉分野他）に分かれてグループを作り、テーマ決め、郊外学習などを実施する。まず日本語で調べ学び、それを英語に置き換え、書いてまとめる「英字新聞」をつくり、話して伝える「バイリンガルプレゼンテーション」（5分の発表）につなげていく。これはコンクールであるため、わかりやすく伝わるように作り上げることが重要になる。

5. 今後の展望

1) 「Rice（おこめ）プロジェクト」について

来年度も参加校を募るが、質の向上を図りたい。米・稲を使い、どのような魅力的な交流活動や学習ができるか、ASPUivNet中心に提案していくことが重要。各地域で数校ずつ参加いただき、情報交換しながら教育内容の質を向上していく。また効果の検証も視野に入れていく必要もある。

2) 「地域のたからものから学ぶ世界遺産学習」について

2014年の世界大会が岡山・名古屋で開かれる際、その中間地である奈良においても何かアクションを起こせば面白い。重要なことは、この取組を継続していくこと。世界遺産学習が持続可能な教育実践になっていくこと。そのためにしっかりとしたビジョンと学校現場を支援していくことが重要。学校の取組だけでなく、地域や市民にも広がっていけばよい。ユネスコスクールは学校間ネットワークといわれるが、教育委員会においてもネットワークづくりが必要。現在22の自治体が参加し世界遺産学習連絡協議会をつくっているが、さらに広がればESDの活動の推進にもつながると考えている。

3) 「対話によって育まれる国際理解」について

誰にでもできるシステムにするためには、「年間収録」という1年間に実施した内容全てがまとめられている資料を必ず作成する必要がある。しかし一方で、誰にでもできる形になるとマンネリ化する傾向もあるため、課題は先生方のモチベーションをいかに高めるかということ。オーストラリアのタスマニアにも姉妹校があり、ウェブ会議ができるようにすることも夢で、今後ハワイ、オーストラリア、日本の3校の生徒がより主体的に動けるようにしていきたい。

6. まとめ（コーディネーターから）

3つの事例から、取組の質の向上、取組自体の持続可能性がポイントであることがわかる。これらを解決するためには、学校間、教育委員会、関連機関とのネットワークを積極的に構築し、誰にでもできる体制づくりを図ること、また先生方の意欲向上が重要になる。日本のESDを発信するチャンスでもある2014年の世界大会に向けて、仲間をつくり意欲を高めながら推進していくことが、それ以降の活動にもつながっていく。

ランチセッション ～協力企業による社会貢献活動紹介～

MSD 株式会社



発表者：小松 眞澄（広報部門 企業広報）

MSD株式会社は、米国のメルクを本社とする世界第3位の製薬企業で、売上の18%を新薬の研究開発に投じる等、科学的研究開発に重点を置き、「人々の生命を救い、生活を改善する革新的な製品とサービスを発見し、開発し、提供すること」を使命としている。日本では2010年に万有製薬からMSDに改称し、処方箋薬やワクチン等を展開している。

企業の社会的責任との認識のもと、持続発展教育の一環として2011年より「サイエンス・スクール」をスタートさせた。この「サイエンス・スクール」は、日本ユネスコ協会連盟と連携して、小学校低学年対象に社員が講師となり実施する2時間のプログラムである。キーメッセージの「科学者のルール」（観察・予想・証明）を伝えながら、偉人のエピソード紹介、病気を学ぶコーナー、薬づくり体験等の授業を行う。昨年11月に千葉県の小学校6年生対象に開催した授業風景を動画で紹介した。

この取組から特に学んでもらいたい点は、命の大切さや不思議、科学の面白さであり、科学の発展に役立ちたいと考えている。先生や生徒対象のアンケートでは90%以上が「将来に役立つ」と答えており、先生からは「進路指導面で役立つ」等のコメントもいただいている。2012年には大都市圏中心に10校で展開し、2013年5月以降は展開の拡大も検討している。

OMソーラー株式会社



発表者：村田 昌樹（取締役 情報企画部長）

OMソーラー株式会社はソーラーという名称から太陽光発電と認識されやすいが、太陽光熱利用を行う企業である。業務について正しく理解してもらうために、こうした説明が必要になることは、教育教材として適していると感じている。家庭における年間エネルギーの最大カテゴリーは「照明・家電」で、「給湯」がそれに続く。暖房・給湯技術を有する当社は、こうした点からもエネルギー教育の意義を見出し、活動を続けている。

OMソーラーは太陽熱を暖房と給湯に利用するソーラーシステムで、住宅2万5000棟、学校や病院などの施設建築650棟への導入実績がある。また、保育園でも暖かい床などが評価され採用されている。学校建築への導入は、省エネ効果と共に、災害時の防災拠点として利用される際もその効果を発揮するため、設計者対象に学校建築のあり方などについてセミナー等を開催し情報も発信している。

2004年より、小学生の総合学習から建築を学ぶ大学生、一般市民や企業・自治体を対象に、建物見学と体験を組み合わせたプレゼンテーションや、ソーラークッカーを持参した小学校の出前授業等を行っている。温熱環境を考えた建築のあり方が大事という説明もしている。このように生活に関わる簡単な話から温熱環境を学んでもらい、社会にも自分の生活にも役立つような内容を伝えていきたい。



発表者：若尾 久（CSR推進室担当課長）

持続可能社会の実現を望み、2004年からの施行を経て2007年に立ち上げた出前授業「命の授業」は、子どもたちに不登校や自殺、いじめ等、子どもの世界の深刻な問題を乗り越える力をもってもらうことを目的にスタートした。今年1月現在で、延べ174機関、14,642人に実施してきた。小・中学校を中心に展開しているが、幼稚園から大学までの学校とNPOやPTA等においても実施している。2012年度は、東日本大震災で被害を受けた小・中学校6校でも実施した。

この授業は5つの柱「三つの学び（絆、命の創造、心の成長）」、「命の大切さ」、「命の絵の描写」、「地球環境」、「世界の子供たち」で構成され、90分を基本としている。1人は全ての人と繋がっているという絆を実感してもらうために絵を見せ・描いてもらう、握手から感じたことを尋ねる、聴診器で命の鼓動を聞く、地球上で貧困に苦しむ人や子どもの死亡数等を説明する等、体感を大事にした内容になっている。また、ガンで亡くなった猿渡瞳氏の「命のスピーチ」を聞き感じたことを話す授業、カンボジアの子どもたちの写真から命や貧しさ・幸せ等について考える授業等、様々な形で命を感じてもらう場として展開している。本授業が、持続可能な社会実現への糸口となり、広く社会に浸透することを願い、今後も積極的な活動を展開していきたい。



発表者：正田 美紀（エコ戦略本部エコ戦略部

次世代環境教育「水育」推進グループ）

次世代環境教育「水育（みずいく）」活動は、次世代を担う子どもたちに水の大切さを伝える活動である。当社の事業のほとんどが、自然の恵みである水を原料とし、自然に感謝し共生していく企業であることを、より分かりやすく伝えたいとの考えで、2005年から「水と生きるサントリー」をコーポレートメッセージとして発信している。

自らの企業活動を地球上の大きな水循環の一部として認識し、水と生きる実践に努め、工場はもちろん、工場以外においても、水源を守り、水を育む活動を行っている。この守る活動は、「サントリー天然水の森」と名づけ、工場の水源エリア中心に全国16か所で展開している。

また、水を大切にする気持ちを子どもたちに伝えてく活動を「水育」と名づけ、サントリー天然水のふるさとに来てもらう自然体験教室「森と水の学校」と、小学校への「出前授業」を活動の柱に据え展開している。「森と水の学校」は2004年から山梨、鳥取、熊本の3地域で実施し13,000人の親子が参加。「出前授業」は2005年より10都道府県で実施し630校48,000人の子どもが参加した。水工場がある地域の自治体、教育委員会、環境省から後援を受け活動している。

今後も水と生きる企業として様々な活動を展開し、「水育」という言葉を多くの方に知ってもらうよう努力していきたい。

全国農業協同組合連合会

全農



発表者：山崎 敏彦（広報部広報SR課）

全農とは全国農業協同組合連合会の略称で、農協において経済事業を担う連合会である。農家が育てた作物の製品化・販売や農業方法の伝授等を実施している。田んぼには稲を育てる他にも様々な力があることから、SR活動として「田んぼの生き物調査」を行い、田んぼを中心に日本の農家、自然、食の関係を子どもたちに学んでもらっている。

この調査は、田んぼや水路に入り生き物の種類を調べるもので、生物多様性の意義や命をいただくことを五感で感じ考

えてみようという活動である。学校の出前授業で進めているが、全国各地で、農協と生産者、生協、学校、NPO等により実施いただいております。全農はそうした活動を支援している。

出前授業では質問を投げかけながら、田んぼの生き物は約5,668種でポケモンの約10倍の種類であることや、そこに生きる生物の生態を紹介する。また、農家は米だけでなく生き物も作っており、田んぼは生物多様性を守る場所であること、洋食化の流れで全国260万ヘクタールの田んぼの内、米を作っているのは160万ヘクタールで、田んぼの危機が進んでいること、これは生物多様性の危機でもあること、米の自給率も低下していること等を説明している。ご飯を食べることが、田んぼ、水、生物多様性を守ることに繋がっていることを理解してもらいたいと考えている。

P&Gジャパン株式会社

P&G



発表者：岩原 雅子（広報・渉外本部）

当社は世界で事業を展開する生活消費財メーカーで様々な商品を展開する一方、サステナビリティ（持続可能性）を重視し、社会貢献活動にも力を入れている。持続可能社会を目指すための活動の柱に、環境保全と社会貢献を挙げ、恵まれない子どもに「生きること・学ぶこと」をテーマにプログラムを展開している。具体的には当社の浄水剤製品を活用し、世界の子どもの命を守る安全な飲み水プログラムなどを推進している。

日本における社会貢献活動には、女性がより自立して社会進出するための女性支援と、子ども支援のためのプログラム「P&G水と生活の環境教室」がある。この「P&G水と生活の環境教室」は、当社の知見を活かし「水」をテーマに開発したもので教育指導要領に則り作成した。小学校3～4年生の社会科と5～6年生の社会科・家庭科等のプログラムを用意している。教材はNPO法人日本水フォーラム、日本持続発展教育推進フォーラムに監修いただき、行政や社外の協力を得ながら推進している点も特徴になっている。

社員による出前授業は2008年に本社のある兵庫県で始まり、延べ177校8,713人に実施し、工場のある群馬県高崎市でも13校802人に実施した。その他地域には学習セットを全国469校93,238人に無償配布している。今後も当社の社会貢献活動の中心として拡大したいと考えている。



発表者：シェルバ 英子

(CSR部ソーシャルイノベーションチーム)

当社では2006年より、不要になったユニクロの服を店頭で回収し、16通りに選別しリユース・リサイクルする「全商品リサイクル活動」を実施している。回収した衣料は主にUNHCR（国連難民高等弁務官事務所）を通じ世界中の難民・非難民に届けられる。これまで25か国に628万着の服を届けてきた。

この活動はわかりやすいとのことで、教育委員会から授業の一環として扱いたいとの提案をいただき、2009年より教育機関との連携で出前授業をスタートした。実施校は51校に上る。反響が良いため、新たに「“届けよう、服のチカラ”プロジェクト」を発表し、小中高の教育関係者向けに国内100校の募集を開始した。

この出前授業は、全校挙げての取組から部活動としての取組まで、学校ごとに規模も形態も様々である。地域にあるユニクロの店長が中心に講師となり、国際問題、難民問題等を踏まえてリサイクル活動の意義などを説明した後、告知や回収プランを話し合い、子どもたちが告知活動（ポスター等の制作）や地域と連携しての回収を行い、最後にユニクロの従業員が難民キャンプに行き服を届け、その報告をするという流れで進められる。

生徒からの感想も好評で、学校関係者からも国際社会への理解促進や、キャリア教育的観点からも満足いただいている。この活動を通して、子どもたちに社会に貢献できる“チカラ”を感じ取ってもらいたい。

LIXIL リフォームネット



発表者：樋口恵美子（マーケティング本部 営業企画統括部
ソリューション企画推進室担当部長）

LIXILリフォームネットは、2010年より「次世代教育支援」として、台所を通じて家族や働くことの大切さを学習する教材キット「台所（キッチン）で遊ぼう、学ぼう」をNPO法人日本持続発展教育推進フォーラムと協働で制作し、全国400校を超える小学校で活用いただいている。これは、以前はサンウェーブブランドとして展開していたものである。

台所でのお手伝いは、子どもの最初の勤労であり、他者への配慮を学び、食という生命を支える部分の大切さに気づき、自分の食べ物をつくることを学ぶ。こうした観点から、持続可能な社会を担う子どもを育成するための授業で使える教材を、当社の扱うキッチンを題材に作成した。先生に授業をしていただく際の学年別指導案や、マグネットシート、ポスター等も用意している。また、小学校5～6年での英語必修化に伴い、多様性のある教材が評価され英語版も完成している。

先生からのアンケートも好評で、食育から家族の絆や生きること、しつけ等も学ばせることができることが分かった、との感想もいただき感激した。小学校から大学までいろいろな使い方ができるのでご採用いただきたい。当社では、この取組以外にも水資源や森林生態の保全、災害復興支援等、国内外含め様々な活動を展開している。今後も持続可能な社会づくりのために推進していきたい。

閉会式・持続発展教育（ESD）大賞表彰式

1. 持続発展教育（ESD）大賞表彰式

第3回持続発展教育（ESD）大賞他5賞の賞状・副賞が、2名の贈呈者より授与され、各受賞校代表者から受賞のお礼とコメントが発表された。

◆贈呈者

賞状授与：佐野金吾（NPO法人日本持続発展教育推進フォーラム 理事）

副賞授与：若尾 久（カシオ計算機株式会社）

◆受賞校からのコメント

「持続発展教育（ESD）大賞」…東京都江東区立八名川小学校

加盟当時を思うと、このような会場で賞を頂けることは誇らしい。持続発展社会の実現に向け、より良い教育をつくり世界に発信していく仲間として、皆さんと力を合わせ活動が続けたい。（手島利夫校長）

「ユネスコスクール最優秀賞」…東京都大田区立大森第六中学校

加盟以来、人と人、人と自然のつながりを中心に様々な活動を行っている。この取組をさらに持続・発展させるために教員に広く伝えると共に、皆さんと共に力強く歩みたい。（税所要章校長）

「小学校賞」…宮城県角田市立東根小学校

加盟したことにより、こうした教材を作成できた。持続発展学習を推進しようという気持ちが、学校教育自体も持続発展させた感謝している。（馬場達也教頭）

「中学校賞」…奈良県奈良市立月ヶ瀬中学校

ESDの視点で様々な活動を捉え直し、本校の一本の柱とすることができた。今後もこの活動を持続し、さらに発展させたい。（進藤宰校長）

「高等学校賞」…愛知県立豊田東高等学校

地域連携、環境教育、国際理解教育を柱にESDを行い、英語の教科指導で受賞させていただいた。今後も継続して積極的に関わり合いたい。（小瀧逸子主任）

「審査委員特別賞」…宮城県気仙沼市立面瀬小学校

2002年から環境教育に取り組んでいる。震災を通し、子どもを未来と繋いでいく仕事の大切さを感じている。今後もESDを推進したい。（岩槻仁教諭）

2. 閉会の挨拶

◆加藤 久雄（国立大学法人奈良教育大学 副学長）

全国から500名以上に参加いただき、活発な交流の1日となったことに会場校として感謝している。

日本のユネスコスクール活動にはいくつかの特徴があり、その一つにASPUnivNetの存在がある。昨秋発表されたガイドラインにも、こうした大学



の支援や協力を得て活動の充実に努めることの大切さが記載されている。当大学は最初にこのネットワークに加盟し事務局を務めた関係で、本大会の会場校を引き受けた次第だが、教育活動にESDの背骨が形成され学校が明るくなったとの声や、教育活動を整理する額縁のようなものになったとの意見を耳にする。「何のために学ぶのか」その答えがESDにはあり、答えに裏付けされた学びに「学ぶ喜び」があり、自ら学び続けることに繋がる。学びの持続発展がそこにある。ユネスコスクールの魅力はこうした点にある。

2014年の最終年会合も、先生方の教育実践があってこそ成立する。明日からの教育実践に何かしら得るものがあれば嬉しい。

◆加藤 重治（文部科学省 国際統括官）

主催者を代表し、参加者や関係者への感謝と、受賞校への祝辞及び一層強力な取組のお願いが述べられた。

ユネスコ国内委員会では、ユネスコ活動の活性化、主にESDの進め方を議論している。「リオ+20」においても、ESDは有効で2014年以降も推進する必要と、教育のプロセスに組み込むことの重要性が謳われた。当委員会でもさらにESDを広めるための骨太の方針を考えており、本日の議論は大変参考になった。特に様々なネットワークの必要性が明確に指摘されたことは意義深い。外国との教員交流も重要と考え、文科省ではESDに関わる米韓中の教員交流プログラムを実施している。

第5回ユネスコスクール全国大会は東京多摩市で開催を予定し、2014年11月には最終年会合も開催される。大会後も一層強力に推進していくが、その中心となるのは現場の先生方の情熱である。今後も国内また世界のESDをリードできるよう先生方の尽力をお願いしたい。



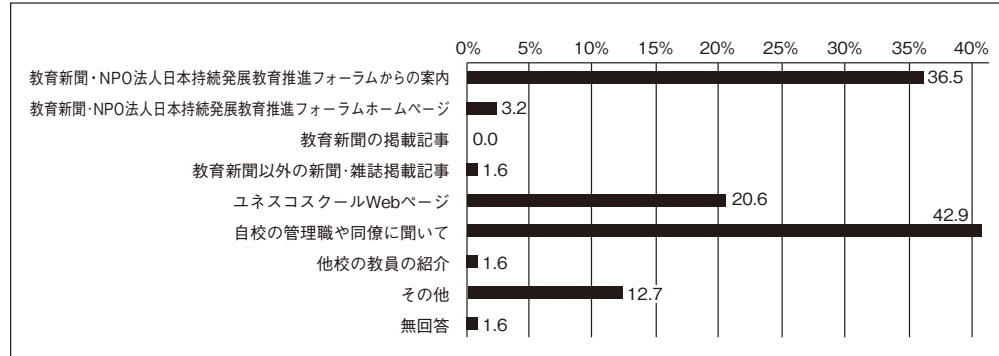
企業展示・団体展示・情報交換会



アンケート結果

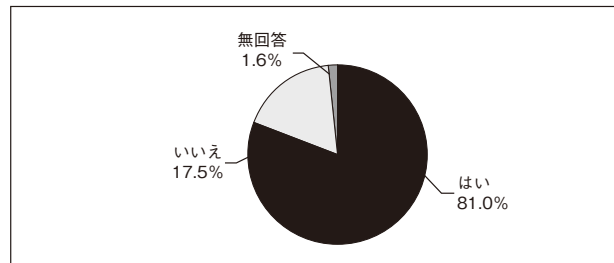
Q1 研究大会認知経路 (MA)

n=63



Q2 ユネスコスクール登録校ですか

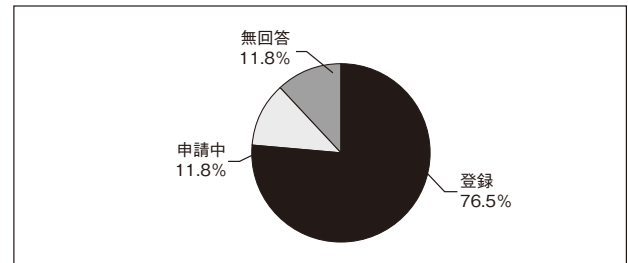
n=63



(ユネスコスクール登録校の方に)

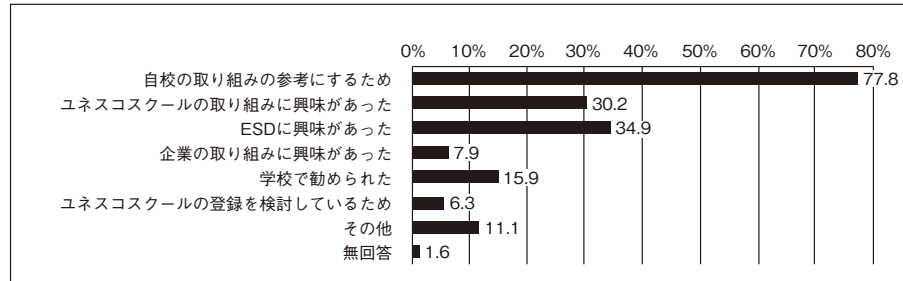
Q2 ユネスコスクール登録・申請中の内訳

n=51



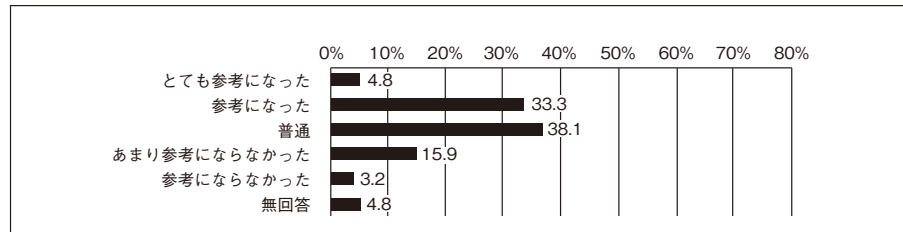
Q3 本研究大会参加理由 (MA)

n=63



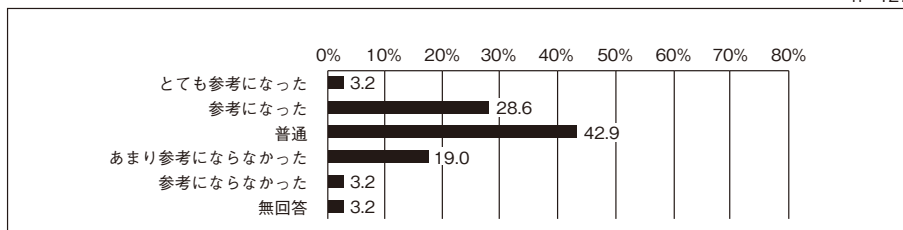
Q4-1 「2014年持続発展教育(ESD)に関するユネスコ世界会議に向けて」の参考度

n=63



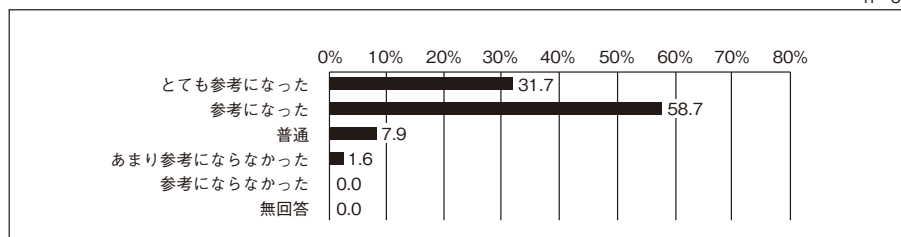
Q4-2 「特別授業」の参考度

n=127



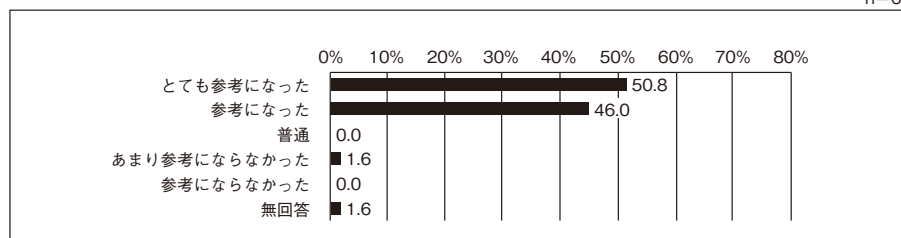
Q4-3 「ランチョンセッション」の参考度

n=63



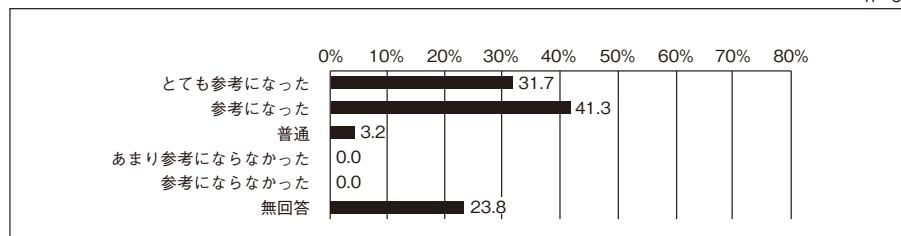
Q4-4 「テーマ別交流研修会」の参考度

n=63



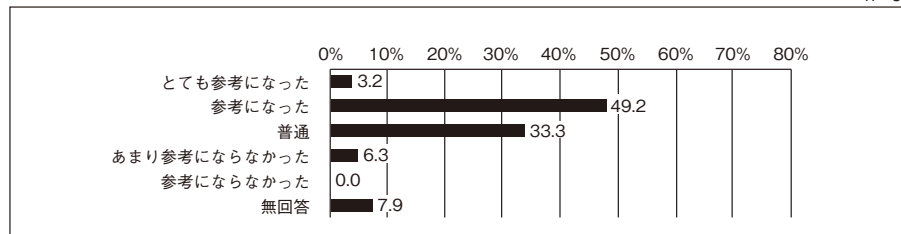
Q4-5 「シンポジウム」の参考度

n=63



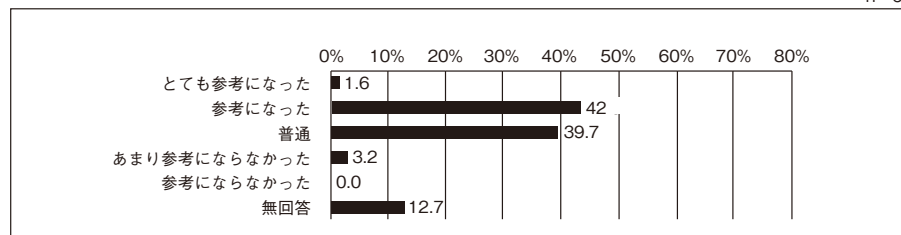
Q4-6 「2014年に向けての展示」の参考度

n=63



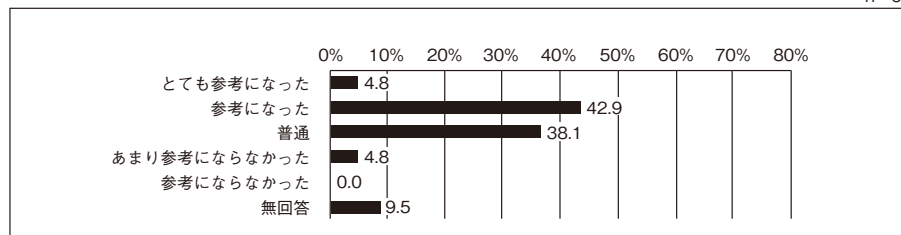
Q4-7 企業展示の参考度

n=63



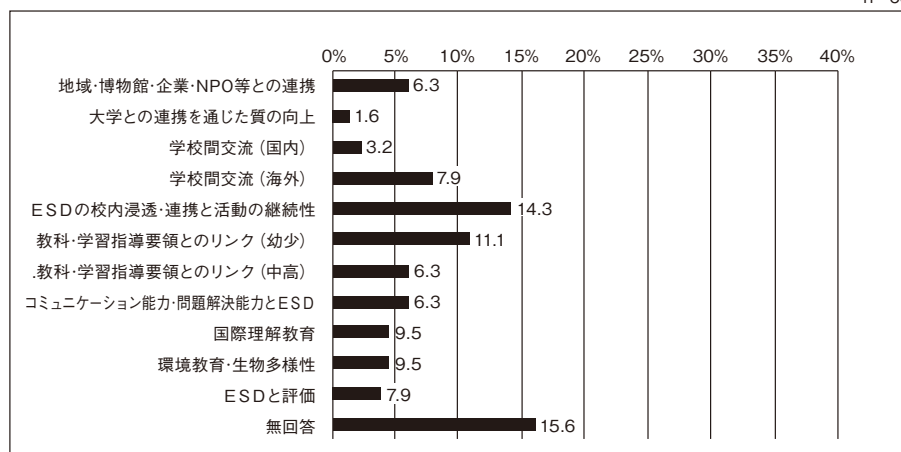
Q4-8 団体展示の参考度

n=63



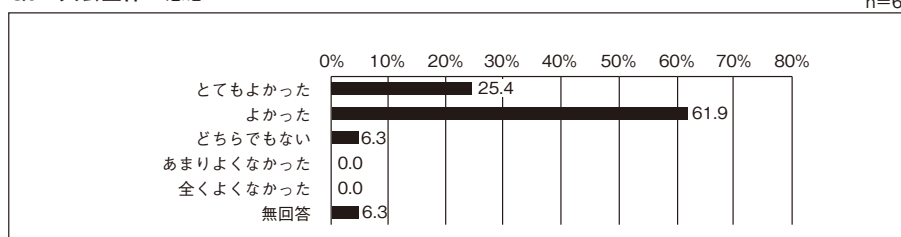
Q4-4S テーマ別交流研修会参加セッション

n=63



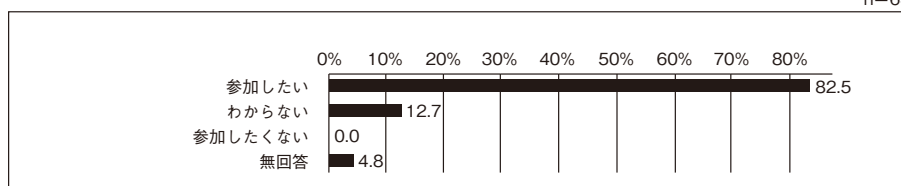
Q5 大会全体の感想

n=63



Q6 次年度以降の参加意向

n=63



協力企業一覧(50音順)

MSD株式会社
OMソーラー株式会社
カシオ計算機株式会社
サントリーホールディングス株式会社
全国農業協同組合連合会
P&Gジャパン株式会社
株式会社ユニクロ
LIXILリフォームネット

展示団体一覧(50音順)

ESDユネスコ世界会議あいち・なごや支援実行委員会
岡山市ESD最終年会合準備室
文部科学省国際統括官付(日本ユネスコ国内委員会)

一般社団法人FEEJapan
特定非営利活動法人開発教育協会
独立行政法人国際協力機構青年海外協力隊
ジャパンアートマイル
日米教育委員会
公益社団法人日本ユネスコ協会連盟
公益財団法人ユネスコ・アジア文化センター

第4回ユネスコスクール全国大会 持続発展教育(ESD)研究大会 報 告 書

発行日：平成25年3月1日
発 行：NPO法人日本持続発展教育推進フォーラム
<http://www.jp-esd.org>
〒101-0051 東京都千代田区神田神保町1-40
電話 03-3295-7051
F A X 03-3295-7054
E-mail: info@jp-esd.org



「ESDの実践上の課題解決に向けて」



この大会は平成24年度「日本／ユネスコパートナーシップ事業」として、
文部科学省の委託を受けて実施しました。